

## 古代日本語助詞と琉球宮古島方言助詞の比較研究 国語の助詞「の」・「が」と方言助詞「nu」・「ga」の用法を中心に

島尻 澤一 (宮古島市史編さん委員)

### はじめに

現在の宮古島市上野野原集落は私が1950年に生まれて、幼少期から大学進学のために沖縄本島に移るまで生活した所である。当時は見渡す限りサトウキビ畑が広がった農村地帯で、小、中学生時代は畑仕事の手伝いや牛や馬、山羊の飼育のための草刈りなどに毎日汗を流していた。そして日頃は、地域の中で子ども集団と一緒にあって、集団遊びや集落の行事などに参加し伸び伸びと過ごした。もちろん地域の人々が話す言葉はいつでもどこでも方言で、集落の人々の日常生活用語であった。当時学校では「共通語励行」の取り組みが教育関係機関を中心に盛んにおこなわれ、子どもたちが方言を話すとペナルティーとして「方言札」があったが、私はほとんど意に介さず日常茶飯事どっぷりと生まれた集落の野原方言を生活語として育った。この論文は1983年国語学研究会「琉大国語」2集に発表した論文を改めて検証し整理した内容に沖縄各地域の辞典を引用しながら野原方言の特徴的な助詞の用法をまとめたものである。この論文での方言資料はすべて野原方言の話者である著者の内省によるものである。

国語の助詞の主格助詞「が」と連体助詞「の」は野原方言における助詞「ga」と「nu」に対応する。しかし、古代日本語における用法について、橋本新吉博士は「助詞・助動詞の研究」(昭和44年)の中で「奈良町以前には『の』と『が』とは、だいたい同じように用いられたので、どちらも、連体的にも、また連用的にも用いられていたのである。」と述べている。これから述べる野原方言の助詞「nu」と「ga」の用法にお

いても、古代日本語の助詞「の」と「が」に用法が類似する面が多くあり、助詞「ga」と「nu」は、どちらも主格助詞、連体助詞の両方に用いられている。しかし、野原方言において、その用法を決定する要素は接続する品詞によるところが大きく用法も多様である。

ここで述べる野原方言の助詞「nu」と「ga」の用法において、野原集落で生まれ育った筆者が内省する方言資料を新たに示しながら古代国語の用法と比較して分析を進めていく。また、野原方言と用法が類似する面については特に注視して論を進めていきたい。

### 1. 古代日本語の助詞「の」と「が」について

「岩波古語辞典」においては、古典語の「が」と「の」の用法について「『が』が人称代名詞または人をさす名詞を承ける場合は、自己の身内とする者に対する卑下・親愛・無遠慮などの意味を併せて示したが、『の』は『神の御代』『大君のみこと』『海女の漁火』など尊敬・敬避・敬遠の対象を承けて用いる点で『が』と相違があり、その相違は鎌倉時代まで残った」と記している。一方古代日本語における助詞「の」と「が」の用法について「岩波講座 日本語7 文法」のなかで安田章氏は「この2つとも、連体格助詞・主格助詞としての機能を持つことで共通するものの、当然の用法領域を異にして、前代まではノの方がガよりも広がったのである。連体格助詞としてガの受ける体言に限っても、語彙的に固定化した『梅が香』『松が枝』などを別にすれば、代名詞、数詞、さらには『右近が局』のような人に関わる語彙程度であった」

と述べている。同じくこの著作で西田直敏氏は「『の』『が』の受ける語彙について(1)代名詞を受ける場合、①人代名詞②指示代名詞、(2)神や人に関する名詞を受ける場合、①神、天皇、皇族、高位高官に関する語は「の」でうける。②肉親や近い、親しい関係のものは「が」でうける。」と万葉集などの文例で示している。

琉球方言の「が」と「の」については、内間直仁氏が1990年「沖縄言語と共同体」の中で、青木佑子氏の1952年「奈良時代における<ガ><ノ>の際について」の中の「奈良時代の『の』『が』の2つの助詞には、用法上において明らかな区別が認められる。『が』は親愛・親近感を表す場合、及びこれより転じて軽侮、嫌悪、増悪の感情を表す場合に用いられ、『の』は敬意を表す場合、または、ある程度心理的距離感を持つ場合に用いられる」、東郷吉男氏の1968年「平安時代の<の><が>について・人物を受ける場合」の中の「平安時代の『が』『の』には、同様な区別が認められ、話してと心理的距離の小さい語、<親しい関係>には『が』がつき、その大きい語<親しくない関係>には『の』がつくという親愛関係の差で用いられていた」という論文を引用しながら琉球方言におけるウチ・ソト意識をもとに論を展開している。

これ等のことを考えながら、これから私が生まれ育った宮古島野原方言のなかの助詞「nu」と「ga」の文例を示し古代日本語の助詞の用法と比較検討し、その用法と機能の特徴について考えていきたい。

## 2. 野原方言における主格助詞「ga」と「nu」について

野原方言において主格助詞「ga」は国語の主格助詞「が」に対応する。主格助詞として「ga」と「nu」の両方用いられる。それは、助詞が接続する語彙によって決まる。

### 2-1. 主格助詞・国語「が」について

#### 国語の助詞「が」が野原方言で助詞「ga」としてつく例

判断や動作、状態などの主体を表す語が人称代名詞や人名、親族語彙、指示代名詞、数詞、役職名、職名など人を表現する語彙のとき「ga」がつく。

#### 2-1-1. 人称代名詞に国語の主格助詞「が」が野原方言において「ga」としてつく例

古代国語において「が」を主格に用いる場合は、卑下する者、目下の者、下賤な者などに用いわれているが、野原方言においては、とくにその傾向は感じられない。むしろ逆の感じがする。

#### ○一人称代名詞「ba ŋ」(わたし、ぼく)・複数「banta」(私たち)

野原方言における一人称名詞は「baŋ」だけである。「baŋ」は、助詞「ga」がつくと「ŋ」が脱落して「baga」(わたしが、ぼくが)となる。

ba ga mi:ku:ttja: matfu:i

《わたしが 見てくるから 待っておれ》

vva: ba ga kīsīkja: umaŋ uijo:

《君は 僕が 来るまで そこに居れよ》

ba ga kakaba mutfi piri

《私が 書いてから 持っていきなさい》

一人称代名詞の複数を表す言葉は「baŋ」《私》に「ta」が接続して「banta」《私たち、僕たち》になる。

banta ga m:na fi: ka fi: su:di

《私たちが みんなで 加勢しよう》

banta ga suru:kja: nivvju:i

《僕らが 揃うまで 寝ておけ》

banta ga abiŋga ikigamata

《私たちが 呼びに 行くべき》

#### ○二人称代名詞「vva」(君、あなた、お前)・複数「vvata」(君たち、あなたたち、お前たち)

野原方言における二人称代名詞は「vva」だけである。「vva」は親しい同僚や後輩たちに使用し、目上の人に使用することはない。目上の人には、呼称「budza」《おじさん》、名前、「adza」《先輩》などの呼びかけに敬語添えて使用することが多い。使用例としては例を示す

adza ga sadari ŋkigisamatfi  
《兄(先輩)が 先に 召し上がって下さい》

budza ga ja:ŋkai mmjaittikara  
baja: atukara ikadi  
《叔父が 家にお帰えりになってから  
私は 後から帰ります》

vva ga fa:daka: ba ga fa:di  
《君が 食べなければ 私が 食べる》

vva ga kakittikara mutfi piradi  
《あなたが 書いてから 持って 行こう》

uja ga mainkaija vva ga sadari piri  
《親のところには 君が 先に 行け》  
二人称の複数形は、「vva」《きみ》に「ta」がついた「vvata」《君たち、お前たち、あなたたち》になる。

vvata ga su:daka: бага su:di  
《君たちが しないなら 私が しよう》  
vvata ga m:nafi: kafi: ssitaibadu  
《君たちが 全員で 手伝い したので  
baja: darittam  
私は 疲れなかった》

no:tiga vvata ga uman urja:  
《なぜ 君たちが そこにいるの》

### ○三人称代名詞「kai」《かれ》・複数形は「kaita」《彼たち》

野原方言の三人称代名詞は「kai」《彼》だけである。

kai ga nakju:ibadu fuwa:fi:u:ta:  
《彼が 泣いていたので 心配していた》

kai ga ku:bakara ma:tsiki piri  
《彼が 来てから 一緒に 行きなさい》

kai ga faittikara nnafi  
《彼が 食べてから 片付けなさい》  
複数形は「kai」《彼》に「ta」が接続した「kaita」《彼たち》になる。

kaita ga namadannafi: u:taibadu  
baga ssita:  
《彼らが 怠けていたので  
僕が やった》

kaita ga kakitti atukara kakadi  
《彼らが 書いて あとから 書くよ》

kaita ga m:na surui: fusakaï ga  
piitaibadu bammai ma:tsiki ikita:  
《彼らが みんな 揃って 草刈りに  
いったので 私も 一緒に 行った》

### ○疑問称代名詞「to:」《だれ》・複数形「to:ta」《誰たち》

野原方言における疑問代名詞は「to:」《だれ》だけである。

umaj a:ta:munu:ba: to: ga ga  
mutfipiitaiba  
《そこにあった物は だれが  
持って行ったか》

to: ga ga umanu izaro: mutfi  
piitaiba

《誰が その 鎌を 持って  
行ったか》

to: ga ga jum gamatajaba  
《誰が 読むことになっているか》

複数形は「to:」《誰たち》に「ta」の接続した「to:ta」《誰たち》である。

to:ta ga ga kifurja:  
《誰たちが 来ているか》

to:ta ga ga sadari piitarja:  
《誰たちが 先に 行ったか》

to:ta ga ga urju:ba: fo:tarja:  
《誰たちが それを 食べたか》

文中に助詞「ga」が二つ並列に現れるが、前

に位置している「ga」が主格助詞で後ろに現れる「ga」が係助詞である。

しかし、最近では若い人たちを中心に、係助詞の「ga」をつけずに表現する用法もつかわれている。その例を示す。

to: ga umaŋ a:ta:munu: fo:tarja:  
《誰が そこに あったものを 食べたか》

to ga sadi piitarja:  
《誰が 先に 行ったか》

to:ta ga nivvju:rja:  
《誰たちが 寝ているか》

urju:ba: to:ta ga kakitaiba  
《それは だれたちが 書いたか》

それでも、依然として疑問代名詞が使用される場合は全体的に疑問代名詞に接続する助詞のあとに係助詞の「ga」が使用されている。

○「to:」《だれ》に接続するいろいろな助詞のあとに「ga」がつく例

「to:+ŋ+ga」の例《だれ+に+か》

to: ŋ ga fwi: gamatajaba  
《誰に 呉れる つものなのか》

「to:+ŋkai+ga」《だれ+へ+か》

to: ŋkai ga tiv gamatajaba  
《誰へ 投げる つもりか》

「to:+tu+ga」の例《だれ+と+か》

to: tu ga asipī ga ikigamatajaba  
《誰と 遊びに 行く つもりなのか》

「to:+kara+ga」の例《だれ+から+か》

usisuba: to: kara ga ko:tarja:  
《牛は 誰から 買ったか》

○反射代名詞「du:」《自分》「nara」《自分》「na:」《自分》

野原方言の反射代名詞は「du:」《自分》「na:」《自分》「nara」《自分》の三つがある。

①「du:」《自分》に主格助詞「ga」のつく例

du: ga ŋfittikara pītunna ŋimiru  
《自分が やってから 他人には させる》

du: ga jumittikara baru ŋkai nara: ŋi  
《自分が 読んでから 私に 教えて》

②「nara」《自分》に主格助詞「ga」のつく例

nara ga ŋfiba dzo:ka:munu pītun  
ŋimja: naraŋ

《自分が すればよいのに 他人に  
させては いけない》

nara ga kakibadu dzoka:nja:ŋ kakai  
《自分が書けば いいように書ける》

③「na:」《自分》に主格助詞「ga」のつく例

na: ga kakittikara barunna kakafi  
《自分が 書いてから 私には 書かせ》

na: ga faittikara atukara mutŋiku:  
《自分が 食べてから あとから 持ってこい》

複数には「du:」《自分》、「nara」《自分》、「na:」《自分》に「ta」が接続し「du:ta:」《自分たち》、「narata:」《自分たち》、「na:ta:」《自分たち》になり、全てに助詞「ga」が接続する。

du:ta ga m:na fa:di  
《自分たちが 全部 食べます》

narata ga katami: piri  
《自分たちが 担いで 行け》

na:ta: ga no:mai su:danadu appju:  
《自分たちが 何もしないで 遊んでいる  
ね》

## 2-1-2. 指示代名詞に「ga」のつく例

野原方言では、指示代名詞が主格に立ったときに「ga」がつく。次にその例示す。

○指示代名詞「kui」《これ》、「ui」《それ》、「kai」《あれ》に「ga」のつく例

○近称「kui」《これ》に「ga」のつく例

kui ga du mutŋi piita:  
《こいつが 持って 行った》

kui ga siŋutu: su:daka: бага su:di  
《これが 仕事を しなれば 僕がするよ》

複数の人や人以外の事物を示す場合は「kui」《これ》+「ta」の形に助詞「ga」が接続する形で表れる

kuita ga du buduī gamatajaba vva:  
mi:ru

《これたちがぞ 踊るので 君は  
見なさい》

kuita ga faittikara vva: faijo:  
《これたちが 食べてから 君は 食べてよ》

### ○中称「ui」《それ》に「ga」のつく例

ui ga du mutʃipīigamatajaba vva:  
jukui

《それがぞ 持っていくので 君は  
休め》

ui ga du jumju: saiga  
《それがぞ 読んでいるね》

複数形は「ui」《それ》+「ta」の「uita」《それたち》《それら》の形で使用される。人  
を示す場合もそれ以外を示す場合も助詞は ga  
が接続する。

uita ga du m:na ba ga dusinukja:  
《これたちがぞ みんな 私の友達だ》

uita ga du m:na ibita: bu:gī  
《これたちがぞ 皆 植えた 砂糖キビだ》

### ○遠称「kai」《あれ》

これは人を表す場合、前述した三人称代名詞  
「kai」《かれ》と同じような用法を表す。

kai ga asipīga piītaibadu tavkja:u:ta:  
《あれが 遊びに 行ったので 一人でいた》

kai ga du ffa: sa:ri: kifū:ta:  
《あれがぞ 子どもを 連れて きていた》

指示代名詞の遠称「kai」《あれ》の複数形は  
「kai」《あれ》+taの「kaita」《あれたち》  
であるが、野原方言では三人称代名詞と語彙が  
同じ「kai」《かれ》であることに関係するのだ  
ろうか。機能としても用法としては、物を示す  
機能がなく、複数な物を表現する語彙としては

使用されない。指示代名詞の「kui」《これ》、  
「ui」《それ》、「kai」《あれ》その語彙事態  
が複数の意味を表現する要素を含んでいるから  
だと考えるが再考して検討する必要がある。

### ○不定称 ndzi 《どれ》

指示代名詞の不定称には「ndzi」《どれ、ど  
ちら》には、助詞「ga」と助詞「nu」のどちら  
もつく。

①ndzi ga ga vva ga ffajaba  
《どちらが 君の 子どもか》

②ndzi nu ga vva ga ffajaba  
《どちらが 君の 子どもか》

①ndzi ga ga vva ga adzajaba  
《どちらが 君の 兄か》

②ndzi nu ga vva ga adzajaba  
《どちらが 君の 兄か》

〈指示代名詞が物を示す場合〉

①ndzi nu ga vva ga nu:majaba  
《どれが 君の 馬か》

②ndzi ga ga vva ga nu:majaba  
《どれが 君の 馬か》

①ndzi ga ga ba ga kīŋjaba  
《どれが 私の 着物か》

②ndzi nu ga ba ga kīŋjaba  
《どれが 私の 着物か》

格助詞の「ga」と「nu」は前に位置し、後ろ  
にあるは「ga」は係助詞である。「ndzi」《ど  
れ》が人を示す場合も物を示す場合も関係なく  
格助詞は「ga」と「nu」の両方接続できる。一  
般的には人を示す疑問詞はほとんど「to:」《だ  
れ》が用いられる。しかし、「ndzi」《どれ、  
どちら》が用いるとしても違和感はなく意味は  
通じる。

### 2-1-3. 人名に主格「ga」がつく例

人の名前にはすべて格助詞「ga」がつく。

urju:ba: sawaitʃi ga du mutʃipiīta:

《それをば サワイチがぞ 持って行った》

Nakama ga du m:na fo:ta:

《名嘉真がぞ 全部 食べた》

○「kanna:、jarabina:」《神の名、童名》に「ga」のつく例

私が生まれた宮古島の野原集落では、ほとんど人たちが、風習として生まれたときに戸籍上の氏名とは別に神の名(童名)を付けられた。神名とは野原集落の各場所にある拝所 utaki 《御嶽》に祭られた神の名前を生まれたばかりの子どもにつけ守り神として子供の健康を願う古い風習から生まれたものである。ちなみに私につけられたの名は [mumuku:rjautaki] 《ムムクーリャウタキ》の守護神の名ボーガマ [bo:gama] である。個人的な事情で生まれて2年間は戸籍上の正式な名前がなく戸籍ができるまでの2年間はこの名で呼ばれた。

人名に助詞「ga」がつくことを通時的に考察するためには地域の古い風習から生まれた神名に助詞「ga」がつく例を見ていく事は重要と考えるのでここで提示する。最初に男性の神名に「ga」のつく例を示す。

ni:maga:nu bo:gama ga du m:na fo:ta:

《ニーマガーヌのボーガマがぞ 全部食べた》

matsikani ga nivvi: u:taibadu

tavkja: ikita:

《マツカニが 寝ていたので

一人で行った》

isa ga tumita: suga du ndza:mmai

nja:n

《イサが 探したけど どこにも  
ない》

tjiru ga nakitsika: no:figa su:di

《チルが 泣いたら どうしようか》

urju:ba: junusi ga du pitu pkai

fi:ta:

《それをば ユヌスがぞ 他人に

呉れた》

女性につける神名には isimiga 《イスマガ》  
bunagama 《ブナガマ》 tjirugama 《チルガマ》  
matsigama 《マツガマ》 migagama 《ミガガマ》  
kamadu 《カマドウ》 matsimiga 《マツミガ》 など  
がある。それに助詞「ga」つく例を示す。

isimiga ga m:puiga piitaiba

mi:ku:

《イスマガが 芋ほりに 行ったので  
みてこい》

bunagama ga mi:ga piitaiba

abiriku:

《フナガマが 見に 行ったので  
呼んで来い》

tjirugama ga nakju:ibadu kimdara:ssa

《チルガマが 泣いているので かわいそう》

matsigama ga du sadari piita:

《マツガマがぞ 先に行った》

migagama ga du m:mu ni:ju:

《ミガガマがぞ 芋を 煮ている》

Kamadu ga kakju:kiba jumi

《カマドウが 書いてあるので 読め》

matsimiga ga ma:tsiki ikadittsa:

《マツミガが 一緒に 行くそうだ》

2-1-4. 数詞に格助詞「ga」のつく例

人数を表す数詞に「ga」のつく例は極めて少ない。tavkja:《ひとり》、futa:i《ふたり》mitsa:i《三人》、juta:i《四人》の四つだけに助詞「ga」がつく。

tavkja: ga sadari piribadu

m:na piita:

《ひとりが 先に 行ったので  
皆行った。》

futa:i ga amai uibadu baja: pukasi:nu

《ふたりが 笑っているの私嬉しい》

mitsa:i ga piribadu to:mai urafunaï

《三人が 行ったら 誰も いなくなる》  
juta:i ga a:gu: aitsika: kiki:jasu:nu

《四人が 歌を歌ったら 聞きやすい》

《五人》以上を表す数詞は《数を表す言葉》  
+《nu》+《人》の複合語で現れる。《五人》  
は itsi 《5》+nu 助詞《の》+pitu 《人》と表  
現される。六人以上も同じ形で現れる。接続す  
る助詞は「nu」だけがつき「ga」はつかない。

Itsinupitu nu du nivvju:  
《五人が 寝ている》

### 2-1-5. 親族語彙に「ga」のつく例

親族語彙には助詞「ga」のつく例と助詞「nu」  
のつく例がある。ここでは助詞「ga」がつく例  
を示す。

uja ga du nivvju:  
《親がぞ 寝ている》  
anna ga du m:mu ni:ju:  
《母がぞ 芋を 煮ている》  
adza ga du fusakai ga piita:  
《兄がぞ 草刈りに 行った》  
budza ga du ja:ju fukju:  
《伯父がぞ 家を 造っている》  
fu: ga du tabaku: fukju:  
《祖父さんがぞ たばこを 吸っている》  
mma ga du atukara kisita:  
《祖母さんがぞ 後からきた》  
bubama ga du sadari iki gamata  
《叔母さんがぞ 先に行くよ》  
agga ga du urju:ba: mutfikisita:  
《姉がぞ それは 持ってきた》  
upuja ga du jamju:ba iki  
mibakari: tura fi  
《大叔父がぞ 病气しているので  
行って見舞ってこい》  
gabafu: ga du nnamamami gandzu:jafi:  
uramaï

《大祖父がぞ 今も 元気で  
いらっしゃる》

### 2-1-6. 役職名に「ga」のつく例

現代的な役職にある者については助詞「ga」  
が用いられる。

kutfo: ga du dziŋ tuï ga kifuta:  
《区長がぞ お金を 取りに来ていた》  
kaitfo: ga du panasaditi u:  
《会長がぞ 話すといっている》  
butfo ga du sakja: numi: bju:iu:  
《部長がぞ 酒を飲んで 酔っている》

### 2-1-7. 職業に「ga」のつく例

finfi: ga du kateihomonnafi: mmjai  
《先生がぞ 家庭訪問で いらっしゃ  
る》

職業に助詞 ga がつく例はこの一つしか確認  
できなかった。

[2006 沖縄県宮古のことば 中松 竹雄]に  
よると、宮古島方言の伊良部島方言においても

finfi: ga du ja:ŋkai mmjai: uï  
《先生がぞ 家へ いらっしゃった。》

多良間方言の場合も

finfi: ga du kitai  
《先生がぞ 来た》

のように、先生には助詞 ga が用いられている。  
また伊良部方言では天皇陛下についても

tenno:heika ga du utsuna: ŋkai  
mmjaittfa:

《天皇陛下がぞ 沖縄に  
いらっしゃるそうだ》

のように尊敬する人に用いられるという助詞  
ga が用いられている。

3-1. 国語の主格助詞「が」が野原方言で助  
詞「nu」としてつく例がある。

野原方言において主格となる「nu」は、現代国語の主格助詞の「が」に対応する。野原方言において主格助詞「ga」は、これまで示してきたように主語が人名や人称代名詞など人と関係のある語彙など限られた語彙にのみ表れるが、主格助詞として現れる「nu」は、人称代名詞、人名以外の普通名詞をはじめ比較自由に表れる。

### 3-1-1. 普通名詞に「nu」のつく例

ki: nu m:na karjuibadu fuwa:fi u:  
 《木が 全部枯れているので 心配している》  
 funi nu du nagja:fu ku:ŋ  
 《船がぞ 長い間 来ない》  
 ami nu furjuibadu kīnnu pusaiŋ  
 《雨が 降っているので 着物が 干せない》  
 pinsu:jafidu dgin nu nja:ŋ  
 《貧しくなって 金が ない》  
 juikabana nu du kagi:ttfa sakju:  
 《百合の花がぞ きれいに 咲いている》  
 maju nu du ffo: nafu:kī  
 《猫がぞ 子供を 産んである》  
 ŷzu nu du jama:sika u:gju:  
 《魚がぞ たくさん 泳いでいる》  
 baja: mi: nu du mi:raiŋ  
 《私は 目がぞ 見えない》  
 ati takakaibadu ti: nu tudukaŋ  
 《とても 高いので 手が 届かない》  
 ŷzutuī gadu funi nu idipiī  
 《漁をしに 船が 出ていく》  
 ffatsī nu i: nu du ŋginja:ŋ  
 《鋏の柄がぞ 抜けてしまった》  
 ki:nukagi nu du sīda:sī: sīda:sī  
 《木の陰がぞ 涼しい》  
 kadzifukī jabadu kadzi nu tsu:ka:  
 《台風なので 風が 強い》  
 nu:ma nu fo: to:ni nu du tumiraŋ

《馬が 食べる餌入れがぞ 探せない》

### 3-1-2. 人を表す普通名詞に助詞「nu」が つく例

bikidun nu du kamakara aiki:kīsī  
 《男がぞ 向こうから 歩いて来る》  
 midun nu du munu: kaiju:  
 《女がぞ 物を 買っている》  
 uipītu nu du tabuku: fukju:  
 《年寄りがぞ たばこを 吸っている》  
 bakamununukja: nu du kuitfaju budurju:  
 《若者たちがぞ クイチャーを踊って  
いる》  
 midumjarabi nu du ffo:ba: nivvafu:ta:  
 《女の童がぞ 子供は 寝かしつけて  
いた》  
 vva ga dusī nu du kamakara kīsī  
 《君の友達がぞ 向こうから くる》

### 3-1-3. 指示代名詞に助詞「nu」のつく例

#### ○近称「kuma」《ここ》につく例

kuma nu jaburju:ba nuifi:ru  
 《ここが 破れているので 縫ってくれ》  
 nīvtukuma: kuma nu du dzo:ka:  
 《寝る場所は ここがぞ 良い》

#### ○中称「uma」《そこ》につく例

baja: uma nu du dzo:ka:  
 《私は そこがぞ 好きだ》  
 ja: ŋkai ikī mttsa uma nu du tsīkaka:  
 《家に 行く 道は そこがぞ 近い》

#### ○遠称「kama」《あそこ》につく例

kama nu du mi:rainsiba urju: nnafi  
 《あそこがぞ 見えないので それを どうかせ》  
 Kama nu du magari: ikī guri:nu  
 《あそこがぞ 曲がって 行き にくい》

#### ○不定称「ndza」《どこ》につく例

ndza nu ga jamjuiba



《どこが 痛いのか》  
 mi:ro:mai ndza nu ga burju:gara  
 ssaip  
 《見ても どこが 折れているか  
 わからない》  
 ndza nu ga no:sadaka: naranniba  
 《どこが 直さなければ ならないか》

### 3-1-4. 数詞に「nu」のつく例

nu:manu pītukara nu du sadari piggita:  
 《馬の 一頭がぞ 先に 逃げた》  
 futakara nudu sadari ffo:  
 nafu:kī  
 《2匹がぞ 先に 子どもを  
 産んである》  
 jumuru nu du anan futakara u:  
 《ネズミがぞ 穴に 2匹 いる》  
 piti:tsī nu du ipkai uti nja:ŋ  
 《ひとつがぞ 海に 落ちてしまった》  
 enpitsī ippon nu du buri nja:ŋ  
 《鉛筆1本がぞ 折れてしまった》  
 tuī nu pītukara nu du in: fa:ita:  
 《鶏の 1羽がぞ 犬に 食われた》  
 ki: nu ippon nu du buri nja:ŋ  
 《木の 一本がぞ 折れてしまった》

### ○人数を表す数詞の場合

五人以上を表す場合には《数》+助詞「nu」+《人》「pītu」という形の複合語として数を表す普通名詞となり、主格助詞「nu」が接続する。

itsīnupītu nu du asīpīga kifū:  
 《五人がぞ 遊びに 来ている》  
 mujunupītu nu du surui budurju:  
 《六人がぞ 集まって 踊っている》  
 nananupītu nu du nu:man nu:ri: piī  
 《七人がぞ 馬に 乗って 行く》  
 ja:nupītu nu du jaguijafi: u:

《八人がぞ 大声をあげて いる》  
 kukunupītu nu du dza:ju tsufi: bigu:  
 《九人がぞ 座を作って 座ってい  
 る》  
 tu:nupītu nu du aiki: kīsī  
 《十人がぞ 歩いて くる》  
 十人以上の数え方については、もっと調査が必要である。

人間以外の動物を数える国語の数詞《匹、頭、羽》は野原方言においてはすべて「kara」で表現される。主格助詞はすべてに助詞「nu」が接続し「ga」はつかない。

innu pītukara nu du upuguijafi:  
 buiju:  
 《犬の 一匹がぞ 大きな声で  
 吠えている》  
 nu:ma nu futakara nu du piggi: uran  
 《馬の 二頭がぞ 逃げていない》  
 futakanutuī nu du nakju:ba  
 sītumutindu narju:  
 《二羽の鶏がぞ 鳴いているから  
 朝になっている》  
 草やイネは束で数えるが、野原の方言では「marukī」《束》となる  
 baja: fata marukī nu fuso:du kaīta  
 《私は 草をば 二束 茹った》  
 物を数える数詞は piti:tsī 《ひとつ》、futa:tsī 《ふたつ》、mi:tsī 《みつつ》、ju:tsī 《よつつ》、itsītsī 《いつつ》、m:tsī 《むつつ》、nanatsī 《ななつ》、ja:tsī 《やつつ》、kukunutsī 《ここのつ》、tu: 《とお》となる。この数詞については係助詞 du がつく形で表現されるのがほとんどである。  
 piti:tsī du mu tji piīta:  
 《ひとつぞ 持って 行った》  
 futa:tsī du fainja: ŋ  
 《ふたつぞ 食べてしまった》

ja:tsi du tivvi: sītita:

《八つぞ 投げて 捨てた》

tu: du pusui: kīsita:

《十ぞ 拾って きた》

### 3-1-5. 親族語彙に「nu」のつく例

助詞「ga」のつかない親族語彙には次のようなものがある。例を示す。

muduvva nu du midzi fum ga piita:

《娘がぞ 水汲みに 行った》

butu nu du pīsarakara muduri kīsī

《夫がぞ 平良から 戻ってきた》

tudzī nu du m:puī ga piita:

《妻がぞ 芋ほりに行った》

ututu nu du nakjuiba sa:ri: ku:

《弟がぞ 泣いているので 連れてこい》

tʃo:naŋ nu du fuso: karju:

《長男がぞ 草を刈っている》

nasīkifa nu du parju: kagu:

《末っ子がぞ 畑を 耕している》

mju:i nu du baru: abirju:

《姪がぞ 私を 呼んでいる》

mmaga nu du asīpī ga kīsita:

《孫がぞ 遊びに 来た》

itsīfunukja: nu du m:nafi

kafi:jafi:u:

《従妹たちがぞ みんなで

加勢している》

ffa nu du nakjuiba mibakari

《子共がぞ 泣いているので 配慮しなさい》

ututu nu du ukīna: ŋkai piita:

《弟がぞ 沖縄本島に 行った》

bikirja nu du surui: sakju: numju:

《男兄弟がぞ 揃って 酒を 飲んでい  
る》

bunarja nu du juīzu ni:ju:

《姉妹がぞ 夕餉の 支度をしている》

mataitsīfu nu du uman nivvju:

《また従妹がぞ そこで 寝ている》

jumi nu du asamunu: ni: ga kīsita:

《嫁がぞ 朝ごはんを 炊きに来た》

muku nu du usīsu aria u:

《婿がぞ 牛を 洗っている》

dzīnan nu du impkai u:gī ga piita:

《次男がぞ 海に 泳ぎに 行った》

### 3-1-6. 職業に「nu」のつく例

imbo: nu du izutuī ga funju: idafu:

《漁師がぞ 漁を捕りに 船を出している》

mmabaku nu du nu:mo: ko:ga kifū:

《馬喰がぞ 馬を 買いに来ている》

īzuakja:da nu du īzu: kami: kīsī

《魚売りがぞ 魚を頭にのせて 来てい  
る》

baŋamutʃa nu du nu:man pīkafi: piita:

《馬車運送業者がぞ 馬に 引かして行った》

īfa nu du mi:ga kifū:

《医者がぞ 診察に 来ている》

wa:fa: nu du wa:ju mi ga ikju:ta:

《豚商い人がぞ 豚を 見に行っていた》

sajafu nu du ja:ju tsufu:

《大工がぞ 家を 建てている》

untenu nu du ŋgīŋkai magari piita:

《運転手がぞ 右に 曲がっていった》

dzunfa nu du baru: abirju:ta:

《警察官がぞ 私を 呼んでいた》

parīffa nu du bu:gīzu ibju:

《百姓がぞ サトウキビを 植えている》

## 4. 野原方言の連体格助詞「ga」と「nu」につ て

国語の連体格助詞「の」は野原方言の連体助詞「ga」と「nu」に対応する。国語の連体格助詞「の」は野原方言においては接続する品詞によって連体格助詞が「ga」になったり、「nu」

になったりする。

#### 4-1. 連体格助詞が接続する品詞によって「ga」がつく例

主格助詞「ga」のところで述べたように連体格助詞の場合も接続する語彙が人名や人称代名詞、指示代名詞、親族語彙、数詞、人に関する語である場合に「ga」格となる。人に関する語である場合には「nu」がつく例がみられる。

##### 4-1-1. 人称代名詞につく例

#### ○一人称「baŋ」《ぼく、私》連体格助詞「ga」がつく例

kunukina ba ga munu  
《この着物は 私のものだ》

ba ga nu:man nu:ri appi  
《私の馬に 乗って 遊びなさい》

kaman mi:raiu: parja: ba ga pari  
《向こうに見える畑は 私の畑だ》

複数を表す場合は「baŋ」《私、僕》+「ta」  
となり「banta」《私たち、僕たち》に連体格助  
詞「ga」がついて用いられる。

banta ga ja: ŋkai iki jukui  
《私たちの家に 行って 休め》

kunu ka:ja banta ga ka:jaba pudgi  
numi

《この井戸は 私たちの井戸だから どうぞ飲  
んでください》

#### ○二人称「vva」《きみ、おまえ》に連体格助詞「ga」がつく例

vva ga dusi nudu kamakara kisi  
《君の友達が 向こうから くる》

kamandu vva ga inna u:ta:  
《向こうにぞ 君の犬は いた》

kurja: vva ga nu:mana:  
《これは 君の馬か》

複数は「vva」《君たち》+「ta」がつき「vvata」

《君たち、お前たちになる》

vvata ga usinudu ja:ssati: nakju:

《君たちの牛が 腹が空いて 鳴いている》

vvata ga uja: gandzu: gandzu uramaina

《君たちの親は 元気にしていらっしゃるか》

#### ○三人称「kai」《かれ》に連体格助詞「ga」がつく例

kai ga anna: ukinaŋkaidu piita:na

《彼の母親は 沖縄に 行ったか》

kunu kuruma: kai ga mununa:

《この車は 彼のものか》

kai ga pindza nudu dza:n upu:upu

《彼の山羊が とても大きい》

複数は「kai」《彼たち》に「ta」がついた  
「kaita」《彼たち》になる。

nnamadu kaita ga ja:kara idikisita:

《今ぞ 彼たちの家から 出てきた》

kaita ga bunarjanukja: m:na iika:gi

《彼らの 姉妹たちは みんな美人だ》

#### ○疑問称「to:」《だれ》に連体格助詞「ga」がつく例

Vva: to: ga ffajaba

《君は 誰の子どもか》

to: ga nu:ma nuga pingitarja:

《誰の馬が 逃げたか》

to: ga kin nuga pusattja:

《誰の着物を 干すのか》

複数の場合は「to:」《誰》に「ta」がついた  
「to:ta」《誰たち》になる。

kaman u:so: to:ta ga ja:dijaba

《向こうにいるのは誰たちの 家族か》

to:ta ga kinnu ga uman sikja:rju:rja:

《誰たちの 着物が そこに散らかっている  
か》

#### ○反射代名詞「du:」《自分》、「nara」《自分》、「na:」《自分》に連体格助詞「ga」のつく例

du: ga ja: jukara fuki

《自分の 家から 建てなさい》  
 kagan ʃi: du: ga mipano:kara mi:mi:ru  
 《鏡で 自分の 顔から 見てごら  
 ん》

nara ga ujo:ba nara ʃi: mi:ru  
 《自分の親は 自分で 世話しなさい》

nara ga kurumajaba umuga:nja:n ʃʃi  
 《自分の車だから 思い通り しなさい》

na: ga mumuba: na: ʃi: ʃidz ʃmiru  
 《自分のものは 自分で かたづけろ》

na: ga dʒinjaba na:ʃi kanri ʃʃi  
 《自分のお金だから 自分で管理しなさい》

複数形はそれぞれに「ta」の接続した形  
 「du:ta」《自分たち》、「narata」《自分たち》、  
 na:ta 《自分たち》になる。

du:ta ga pariya m:nafi: mibakari  
 《自分たちの畑だから 皆で目配りしよう》

narata ga minakajaba narataʃi: mi:ru  
 《自分たちの庭だから 自分たちで 見ろ》

na:ta ga jarabinukjo:ba na:ta ʃi: ʃits  
 ʃkiru

《自分たちの子どもは 自分たちで躓け  
 なさい》

#### 4-1-2. 指示代名詞に連体格助詞「ga」の つく例

指示代名詞は野原方言においては、事物を示  
 す場合と人を示す場合の両方を有している。特  
 にその中でも人称代名詞としての機能が強いよ  
 うである。そのために助詞は「ga」がつく。

#### ○近称「kui」《これ》に連体助詞「ga」つく例 [事物を示す場合]

kui ga naʃzuba: vva ga fai  
 《これの実は 君が 食べなさい》

burju: kui ga i:ju vva ga no:ʃi  
 《折れている これの柄を 君が直せ》

kuita ga juda: m:na buri:duuiba

nnafi  
 《これらの枝は みんな折れているので  
 片付けろ》

[人を示す場合]

kui ga ti:ju tsu:ku ntʃamiru  
 《これの手を 強く掴まえろ》

nivju: kui ga nnuttsa nagja:funja:ŋ  
 《寝ている この命は 長くない》

kuita ga ffanukja: asipī ga piita:  
 《これの 子どもたちは 遊びに行った》

#### ○中称「ui」《それ》に「ga」のつく例

[事物を示す場合]

ui ga tanju:du ibita:  
 《その 種を 植えた》

aminufurju:ibadu ui ga mi:n  
 kumarju:ta:

《雨が降っていたので それの中に  
 籠っていた》

uita ga funja: to ga munujaba  
 《それらの 船は 誰のものか》

[人を示す場合]

ui ga ujanudu kamaŋ tatʃu:ta:  
 《その親が 向こうに 立っていた》

nakju: ui ga ffanudu dʒa:ŋ upuka:  
 《泣いているその子共が もっとも大きい》

uita ga innudu ati bui  
 《それらの犬が ととも 吠える》

#### ○遠称「kai」《あれ》に連体助詞「ga」つく例

[事物を示す場合]

kai ga naʃjuba: m:nan fi:ru  
 《あれの実は みんなにあげなさい》

kai ga ka:ja mukī jasī:jasi  
 《あれの皮は 剥き易い》

kaita ga ka:ja nagarinudu pja:ka:  
 《あれらの 川は 流れが 速い》

[人を示す場合]

kai ga buto: pariŋkaidu piita:

《あれの夫は 畑に 行った》

unufunja: kai ga ffanu munu

《その船は あれの 子どもの ものだ》

kaita ga pindza: uda:udadu u:

《あれらの 山羊は 太っている》

遠称を表す指示代名詞の「kai」《あれ》は、人称代名詞の「kai」《かれ》とおなじであるため、人を表すときはまったく人称代名詞の用法と機能と同じになる。ここで示した例は、あまり使用されない。

#### ○不定称「ndzi」《どれ》には連体助詞「ga」はなく「nu」がつく例

[事物を示す場合]

ndzi nu funuī nu ga mmakaiba

《どの ミカンが おいしいか》

ndzi nu ti:ŋga mutfu:iba

《どの 手に 持っているか》

疑問称「ndzi」《どれ》には、人を示す機能はなく、事物を示す機能だけである。従ってこれまで述べた他の指示代名詞とは違い、接続する連体格助詞に「ga」がつくことはなく、すべて助詞「nu」が接続する。

この指示代名詞の疑問称は、野原方言では指定を示す代名詞の疑問称を ndzi 《どの》と同じ語である。したがって前述の例文の日本語訳は「どのみかんが」「どのてに」になる。また、疑問称の場合複数形はない。

#### 4-1-3. 人の名前に連体助詞「ga」のつく例

bi'ŋ ga na:ja: 'umuŋfi'ja:

《保栄茂の 名前は 面白いね》

nakama ga kī'n na nza'ŋga aiba

《名嘉真の着物は どこに あるか》

makoto ga sabanudu tumira'i'ŋ

《誠の 草履が 探せない》

#### ○男性の神名、童名に連体格助詞「ga」のつく

#### 例

bo:gama ga ffa to:java

《ボーガマの 子どもは 誰か》

matsikani ga ffatsizu tuiku:

《マツカニの 鍬を 捕ってこい》

junusi ga ti:nudu fukurju:

《ユヌスの手がぞ 腫れている》

taru ga sakju:ba: to: ga ga

mutfipiitaiba

《タルの 酒は 誰が

持って行ったか》

isa ga pindzanudu pi'ŋ gi: pirinja:'ŋ

《イサの 山羊がぞ 逃げて行ってしまった。》

#### ○女性の神名、童名に連体格助詞「ga」のつく例

kamadu ga ba:kinudu tumirai'ŋ'

《カマトウの 籠が 探せない》

miga ga kanamai'ŋkai urju: kamifimiru

《ミガの頭に それを 載せなさい》

kanimiga ga nabja: nnada ni:nna:

《カニメカの鍋は まだ煮えないのか》

matsumiga ga sadzizu mutfikifituraŋi

《マツミガの タオルを 持ってきてあげろ》

bunagama ga ja: nudu kagifu narju:

《ブナガマの 家が きれいになっている》

tŋiru gama ga innudu kamakara kisi

《チルガマの 犬がぞ むこうから 来る》

#### 4-1-4. 役職に連体格助詞「ga」と「nu」のつく例

役職の場合「ga」がついても「nu」がついてもあまり違和感がない。

①kutfo: ga panasiza atidu na gaka:

②kutfo: nu panasiza atidu na gaka:

《区長の話は あまりにも長い》

①fudzibufo: ga kuruma: nu:ijasī:nu

②fudzibufo: nu kuruma: nu:ijasī:nu

《婦人部長の車は 乗りやすい》

①kakarifo: ga kabana miimunu

②kakarifo: nu kabana miimunu

《係長のカバンは 新しいものだ》

#### 4-1-5. 職業に連体格助詞「ga」のつく例

職業に連体助詞「ga」がつくのは「先生」の一例である

jinfi: ga panasiza itsimai umuffi

《先生の話は いつも面白い》

#### 4-1-6. 数詞に連体格助詞「ga」のつく例

##### ○人数を表す数詞に連体格助詞「ga」つく例

uma: tavkja: ga ja:

《そこは 一人の 家だ》

karja: futa:i ga kurado:

《あれは 二人の 車だよ》

mitsa:i ga dusisa to:jaba

《三人の 友達は 誰か》

kamanu parja: juta:i ga munu

《向こうの 畑は 四人のものだ》

人数を表す語に連体助詞「ga」のつく例はこの四例だけである。

### 5. 連体格助詞「nu」がつく例

野原方言における連体格助詞「nu」は国語の連体格助詞「の」に対応する。ただし、前述した連体格助詞「ga」が接続する語、人名、人称代名詞、数詞、指示代名詞以外の語には連体格助詞「nu」がつく。連体格助詞「nu」は「ga」より多くの語に自由につく。

#### 5-1. 普通名詞に連体格助詞「nu」のつく例

ki: nu judo: buina

《木の 枝を 折るな》

nu:ma nu mi:ja kagimunu

《馬の 目は きれいだ》

bafa nu ku:runu du ngi nja:'ŋ

《馬車の 輪が 抜けてしまった》

ja: nu jadunudu jaburinja'ŋ

《家の 戸が 壊れてしまった》

ka: nu mi:ju nudzukinajo:

《井戸の 中を 覗くなよ》

funu nu pu:nudu pisugara'ŋ

《船の 帆が 拡がらない》

m:nafi: pana nu naiju ibiru

《みんなで 花の 苗を 植えろ》

mtsī nu patanna musinudu jama:kasa u:

《道の 側には 虫が たくさんいる》

ki:ndu ga:sī nu sīdigaranu arju:

《木に 蟬の 抜け殻が ある》

ki: nu va:bindu tuī nu ssīnu arju:ta

《木の 上に 鳥の巣が あった》

#### 5-2. 代名詞に連体格助詞「nu」のつく例

##### (1) 場所を示す代名詞につく例

○近称「kuma」《ここ》に連体格助詞「nu」のつく例

kuma nu ja:nna to:mai ura'ŋ

《この 家には 誰も いない》

kuma nu pīto: ndzagara: ŋkaidu piri:

ura'ŋ

《この 人は どこかに行って いない》

○中称「uma」《そこ》に連体格助詞「nu」のつく例

uma nu pano: kazaribadu dzo:fu naī

《その 花を 飾った方が 良くなる》

ikittikara uma nu kadu: magari piri

《行ってから その角を 曲がっていけ》

○遠称「kama」《あそこ》に連体格助詞「nu」のつく例

kama nu mattfa:ja mununudu jasī:jasi

《あその店は 物が安い》

ikitsika: kama nu ja:nu tsikafundu a:

《行ったら あそこの家の 近くにある》

○不定称「ndza」《どこ》に連体格助詞「nu」  
のつく例

ndza nu ja:nu ga vvata ga ja:jaba  
《どこの 家が 君たちの家か》

ndza nu mttsu ikibaga dzo:kaiba  
《どこの 道を行けばよいか》

(2) 様子を示す代名詞につく例

○近称「kantfi」《こんな》に連体格助詞「nu」  
のつく例

kantfi nu pano:ba: mi:ta:kuto: nja:n  
《こんな 花は 見たことがない》

kantfi nu kadza: kabita:kuto: nja:ŋ  
《こんな 臭いは 嗅いだことが ない》

○中称「antfi」《そんな》に連体格助詞「nu」  
のつく例

antfi nu jugurikiŋnuba:mu tfi:iki  
sitiru  
《そんな汚れた着物は 持って行って  
捨てる》

antfi nu s'isaippanasiza su:danaui  
《そんな難しい話は しないでいろ》

○遠称「antfi」《あんな》に連体格助詞「nu」  
のつく例

野原方言では中称「antfi」《そんな》と同じ  
語で表現している。

antfi: nu funju:ba: ndzagga tsufu:  
《あんな船は どこで作っているか》

antfi nu pindzo:ba: mi:ta:kuto:nja:ŋ  
《あんな山羊は 見たことがない》

○不定称「no:fi:」《どんな》に連体格助詞「nu」  
のつく例

no:fi: nu pudubaka:inu nu:manuga  
dzokaba

《どんな 大ききぐらいの 馬が  
いいか》

no:fi: nu irunu pano:ga ko:gamatajaiba

《どんな 色の花を 買うつもりなの  
か》

(3) 指定を表す代名詞につく例

○近称「kunu」《この》に連体格助詞「nu」の  
つく例

ka:ddzatsika: ku nu pano:kai  
《買うなら この花を買え》

ku nu mttsu ikitsika: ndzaŋkaiga ikja:  
《この道を行くと どこに行くの》

○中称「unu」《その》に連体格助詞「nu」のつ  
く例

u nu ffa: to:ga ffajaba  
《その子どもは 誰の子どもか》

juikabana: u nu pana  
《百合の花は その花だ》

○遠称「kanu」《あの》に連体格助詞「nu」の  
つく例

ka nu ki:nudu findaŋ gi:sai  
《あの木が センダン木だよ》

pja:pja:ti: tsikadijatsika: kanu funisai  
《早く着くつもりなら あの船だよ》

○不定称「ndzi」《どれ》は指示代名詞と同じ  
不定称「ndzi」《どれ》である。用法・機能も  
同じである。連体助詞「nu」のつく例を示す

ndzi nu funinga vva: nu:i gamata jaba  
《どの 船にが 君は 乗るつもりなのか》

ndzi nu ffanu ga vva ga vvajaba  
《どの子が 君の子どもか》

5-3. 数詞に連体助詞「nu」がつく例

五人以上になると《数》+助詞「nu」+《人》  
「pitu」の形になり連体格助詞「ga」がつくこ  
とはない。五人以上を表す数詞にはすべて連体  
助詞「nu」がつく、

Itsi nu pitu nu bo:finudu tubi piita:  
《五人の 帽子が 飛んでいった》

bantaga muju nu pitu nu dusinudu surui

budurju:  
 《私たちの六人の友達が 集まっ  
 て踊っている》  
 kaman u: nana nu pītu nu dusīnu nu:man  
 nudu piī  
 《向こうに居る 七人の 持ち馬が  
 行く》  
 banta ga ja:nu pītu nu dusīnu innudu  
 jaguijafi: u:  
 《僕たちの八人の 友達の 犬が  
 大声をあげて いる》  
 ugana:rju: kukunu pītu dusīnukaja: nu  
 dza:ju tsufi: sakju: numju:  
 《集まっている九人の 仲間が  
 座を作って 酒をの飲んでいる》  
 sugari:nu tunupītu nu bakamununu  
 aiki: kīsī  
 《着飾った十人の 若者が  
 歩いて くる》  
 主格助詞の項で述べたように人間以外の動物  
 を数える国語の数詞《匹、頭、羽》は野原方言  
 においてはすべて「kara」で表現される。連体  
 助詞においてはすべてに連体格助詞「nu」が接  
 続し、後ろに係助詞 du〈ぞ〉が現れる  
 pītukara nu in nud upuguijafi: buiju:  
 《一匹の 犬がぞ 大きな声で吠えてい  
 る》  
 futakara nu nu:ma nudu pinggi: uran  
 《二頭の馬がぞ 逃げて いない》  
 futaka nu tuī nudu nakju:ba  
 sītumuti  
 《二羽の 鶏がぞ 鳴いているから  
 朝だ》  
 ippon nu ki:nudu uiju:  
 《一本の木が 生えている》  
 物を数える数詞は「piti:tsī」《ひとつ》、  
 「futa:tsī」《ふたつ》、「mi:tsī」《みつつ》、

「ju:tsī」《よつつ》、「itsītsī」《いつつ》、  
 「m:tsī」《むつつ》、「nanats ī」《ななつ》、  
 「ja:tsī」《やつつ》、「kukunutsī」《この  
 つ》、「tu:」《とお》となる。この数詞につい  
 ては連体格助詞「nu」がつく形で表現され、後  
 に係助詞「du」が現れる。

piti:tsī nu funiizu du mutfi piita:  
 《ひとつの ミカンをぞ 持って 行った》  
 futa:tsī nu fukjagju: du fainja: ŋ  
 《ふたつの おはぎをぞ 食べてしまっ  
 た》  
 ja:tsī nu saro: du tivvi: sītita:  
 《やっつの 皿をぞ 投げて 捨てた》  
 tu: nu ūinagujo: du pusui: kīsīta:  
 《十の貝殻をぞ 拾って きた》

#### 5-4. 親族語彙に連体助詞「nu」のつく例

国語の連体助詞「の」は野原方言の次の親族  
 語彙においては同じように連体格助詞「nu」が  
 つく。

muduvva nu kīŋnu aro: ga piita:  
 《娘の 着物を 洗いに 行った》  
 butu nu saba: nja:nfudu  
 narjuta:sugadu muduri kīsju:  
 《夫の 草履は 無くしたが  
 戻ってきた》  
 tudzī nu ti:ja m:puīnudu dzo:dzī  
 《妻の 手は 芋ほりが 得意だ》  
 ututu nu ffa nu nakjuiba sa:ri: ku:  
 《弟の 子どもが 泣いているので 連れて  
 こい》  
 tfo:nan nu nu:manudu fuso: fuiju:  
 《長男の 馬が 草をたべている》  
 nasikiŋa nu bo:sju: mutfi ku:  
 《末っ子の帽子を 持ってこい》  
 mju:i nu sjumuttsudu ba ga jumju:  
 《姪の 本を 私が読んでいる》



mmaga nu innudu asipī ga kīsīta:  
 《孫の犬が 遊びに 来た》  
 itsīfunukja: nu sīgutudu m:nafi  
 kafi:jafi:u:  
 《従妹たちの仕事を 皆で  
 加勢している》  
 ffa nu nakīkui'ŋkai nnapi mibakari  
 《子共の 泣き声に もっと配慮しなさい》  
 ututu nu kanamaīza ati upukaibadu  
 nara'ŋ  
 《弟の頭は 余りにも大きいので  
 困る》  
 bikirja nu itsīmunnudu surui: sakju:  
 numju:  
 《男兄弟の 親戚が 揃って 酒を  
 飲んでいる》  
 bunarja nu majunudu juīgu faiju:  
 《姉妹の猫が 夕餉を たべている》  
 mataitsīfu nu maffa: innu nivtukurandu  
 narju:  
 《又従妹の 枕は 犬の根床に  
 なっている》  
 jumi nu ti:fīdu asamunu: ni: fi:ta:  
 《嫁の手で 朝ごはんを 煮て呉れた》  
 muku nu usīsudu m:nafi: aro:ta:  
 《婿の牛を みんなで 洗った》  
 dzīnan nu dusīnudu imŋkai u:gī ga piīta:  
 《次男の友達が 海に泳ぎに行った》

### 5-5. 職業に連体助詞「nu」のつく例

imbo: nu amma īzutuī nna dzo:to:saiga  
 《漁師の網は 漁を捕りには 上等だよ》  
 mmabaku nu dzīŋna nu:mo: ko:tamido:  
 《馬喰の金は 馬を 買うためのもの  
 だよ。》  
 īzuakja:da nu so:kja: īzu: īzi:

uītamido:  
 《魚売りの 籠は 魚を入れて  
 売るためだよ》  
 baŋamutŋa nu so:ja nu:mo: pja:pja:ti:  
 pīkasītamido:  
 《馬車業者の 竿は 馬を 早く引かす  
 ためだよ》  
 īfa nu tŋofīŋkja: tsu:ku mi:tamido:  
 《医者 of 聴診器は 良く診察をするためだ  
 よ》  
 wa:fa: nu mi:ja wa:judu ju: mi:ju:  
 《豚商い人の 目は 豚をよく 見ている》  
 sajaŋu nu do:vva ja:ju fukītamisai  
 《大工の道具は 家を 建てるためだよ》  
 untenŋu nu ŋgītinudu uguki: ŋgīŋkai  
 magari piīta:  
 《運転手の 右手が 動いて 右に  
 曲がっていった》  
 dzunŋa nu tinudu baru: abirju:ta:  
 《警察官の 手が 私を 呼んでいた》  
 pariŋfa nu ja:dja: bu:gīzudu ibju:  
 《百姓の家族は サトウキビを 植えて  
 いる》

## 6. 野原方言において主格と連体格両方に助詞「ga」だけがつく例

両方に助詞「ga」が接続する文例を示しながらその用法について検討したい。

### 6-1. 人称代名詞

人称代名詞は ba'ŋ [ぼく、わたし]・vva [きみ、あなた]・kai [かれ]・nara, du: na: [自分]・to: [だれ] 以上の7つである。示した文例を見るとすべて主格と連体格に助詞「ga」がつき、「nu」つかない。前にものべたように vva [きみ、あなた] は、方言で目上の人に使うことはない。より身近な人に使う言葉である。

○主格に ga のつく例

ba ga mi:ku:t tʃa: ma tʃu:i  
 《わたしが 見てくるから 待っておれ》  
 vva ga kakittikara mutʃipiri  
 《きみが 書いてから 持っていけ》  
 kai ga nakju:ibadu ʃuwa:ʃi:u:ta:  
 《かれが 泣いていたので 心配していた》  
 to: ga ga umanu izaro: mutʃi  
 piitaiba  
 《誰が その 鎌を 持って  
 行ったか》

○連体格 ga のつく例

ba ga nu:man nu:ri appi  
 《私の馬に 乗って 遊びなさい》  
 vva ga dusinudu kamakara kisi  
 《君の友達が 向こうから くる》  
 kai ga anna: ukinaŋkaidu piita:na  
 《彼の母親は 沖繩に 行ったか》  
 to: ga numa nuga piŋgitarja:  
 《誰の馬が 逃げたか》  
 na: ga mumuba: na: ʃi: ʃidzimiru  
 《自分のものは 自分でかたづけろ》

どちらの例も共通するのは、接続する語彙が人を表す意味を持つということである。

6-2. 人名

○主格に ga のつく例

urju:ba: sawaitʃi ga du mutʃipiita:  
 《それをば サワイチがぞ 持って行った》  
 nakama ga du m:na fo:ta:  
 《名嘉真がぞ 全部 食べた》

○連体格に ga のつく例

bi'ŋ ga na:ja: 'umuʃʃi'ja:  
 《保栄茂の名前は 面白いね》  
 ŋakama ga ki'n nza'ŋga aiba  
 《名嘉真の着物は どこにあるか》

この例で共通するのもどちらも人に共通する

語彙である。

6-3. 神名・童名

つぎに主格助詞と連体格助詞「ga」が接続する人名である。文例で示すように助詞 ga は戸籍上の人名 sawaitʃi [サワイチ]・ŋakama [名嘉真] に接続し、親しい人につくという意識がある。同じ人名で神名(童名)にも「ga」がつく、私の生まれ育った野原集落では、子どもが生まれたときに、集落にあるすべての御嶽(拝所)に祭られている神の名前をすべて紙に印し、それを盆にのせ振ったとき落ちた名前を生まれた子どもに守り神として付ける風習がある。子どもが健やかに育てほしいという集落で共に生活する人々の思いからだろうか。現在その風習はほとんど見られなくなったが、私の子どものころまではあった。今でも年寄りや年配の中には、お互いを親しく呼び合う名前として戸籍上の名前よりも神名で呼び合う習慣が生活の中に生きている。女性につける名前 matsimiga [マツミガ]・[カマドウ]・bunagama [ブナガマ]・男性 bo: gama [ボーガマ]・junusi [ユヌス]・matsikaŋi [マツカニ] などつける名前の区別はあるが、助詞 ga はすべてにつく。神からの授かりもののため親しみと尊敬の思いがあるからだろうか。nu はまったく接続しない

urju:ba: junusi ga du pitu ŋkai  
 fi:ta:

《それをば ユヌスがぞ 他人に  
 呉れた》

女性につける神名には isimiga 《イスマガ》  
 bunagama 《ブナガマ》tʃirugama 《チルガマ》mats  
 igama 《マツガマ》migagama 《ミガガマ》kamadu  
 《カマドウ》matsimiga 《マツミガ》などがある。

isimiga ga m:puiga piitaiba mi:ku:  
 《イスマガが 芋ほりに行ったので みてこい》

## 6-4. 指示代名詞

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す《これ》《それ》《あれ》は人を表す代名詞としても用いられ、これまでの文例が示すように主格、連体格のどちらも助詞 ga が現れる。その他の指示代名詞が人を表す代名詞として用いられることはない。事物を示す《これ》《それ》《あれ》は示すものが人でなくても関係なく助詞 ga が現れる。しかし、指示代名詞で疑問を表す ndzi 《どれ》には「ga」ではなく助詞「nu」が現れる。

kui ga si:ɡutu: su:daka: baga su:di  
《これが 仕事を しなれば 僕がするよ》  
kui ga du baga sakasita: rannu pana  
《これがぞ 私が 咲かした ランの花だ》  
ui ga du mutʃipiiɣamatajaba vva:jukuui  
《それがぞ 持って行くので 君は休め》  
kai ga du ffa sa:ri: kifju:ta:  
《あれがぞ 子どもを 連れて きていた》

## (人以外に関する物を示す場合)

kui ga du ba ga nu:ma  
《これがぞ 私の 馬だ》  
ui ga du banta ga pari  
《それがぞ 私たちの 畑だ》  
kai ga du ba ga ko:ta: kiŋ  
《あれが 私が 買った 着物だ》

野原方言では、指示代名詞の中の事物を示す《これ》《それ》《あれ》は人を表す代名詞としても用いられ、主格に立った時に助詞 ga が現れる。

その他の指示代名詞が人を表す代名詞として用いられることはない。事物を示す《これ》《それ》《あれ》は示すものが人でなくても関係なく助詞 ga が現れる。

○指示代名詞 kui 《これ》、ui 《それ》、kai 《あれ》に ga のつく例

## (人を示す場合)

kui ga du mutʃi piita:  
《これがぞ 持って 行ってしまった》  
ui ga du mutʃipiiɣamatajaba vva:  
jukuui  
《それが持って行くので 君は  
休め》  
ndzi ga ga vvaga ffajaba  
《どちらが 君の 子どもか》  
kai ga asipiga piitaibadu tavkja:u:ta:  
《あれが 遊びに 行ったので 一人でいた》

## (人以外のものを示す場合)

kai ga du baga ko:ta: kiŋ  
《あれが 私が 買った 着物だ》  
kuita ga du baga tsikanaiu:  
pindzanukja  
《これらが 私が 飼っている  
山羊達だよ》

指示代名詞の疑問称には ndzi 《どれ、どちら》には、助詞 ga と助詞 nu のどちらもつく

- ①ndzi ga ga vvaga nu:majaba  
②ndzi nu ga vvaga nu:majaba  
《どれが 君の 馬か》  
①ndzi ga ga vvaga ffajaba  
②ndzi nu ga vvaga ffajaba  
《どちらが 君の 子どもか》

## 7. 格助詞「に」について

現代国語の格助詞「に」は、野原方言においては、用法や機能によって助詞「n」「ŋkai」「ga」と変化した形で現れて接続する。次にその例をしめす。

## 7-1. 格助詞「に」が動作作用の目的を示すとき野原方言では「ga」で表す

国語の格助詞「に」は動作の目的を表す用法で用いる場合は野原方言では「ga」で現れる。

adzatudu buduizu mi: ga ikju:ta

《兄と 踊りを見に行っていた》  
 pindzanu fusa kai ga ikabaka:narap  
 《山羊の 草刈りに 行かなければなら  
 ない》  
 ja:sifunarju:iba asamunu: fo: ga ikadi  
 《腹が減ったので 朝ご飯を食べに行こう》  
 pja:pja:ti: annatu idjo: ga piri  
 《早く 母さんと会いに 行きなさい》  
 baja: dzinnu' tuī ga du kīsita:  
 《私は お金を 取りに 来た。》  
 dzu: afu: fo: ga  
 《さあ 昼ご飯を食べに(行こう)》  
 fu:gadu ko:ta: nu:mo: mi: ga mmjaiju:  
 《祖父がぞ 買った馬を見に お見えに  
 なっている》

この場合、動作名詞に格助詞「ga」が接続するものの述語となる名詞には、移動を表す動詞が来る。それ以外の動詞は来ない。pīī 《行く》 ikī、《行く》、kīsī 《来る》、jarasī 《行かせる》 dzu: 《さあ(行動を促す呼びかけ)》、mmjaiī 《いらっしゃる(敬語)》

○国語の「に」が野原方言で「ga」以外で現れる例を示す。

### 7-2. 動作作用の帰着するところのものを示すときは「n」で表す

funi n nu:ri: ja: nkai piradi  
 《船に 乗って 家に帰る》  
 nu:ma n nu:ripiri  
 《馬に 乗っていけ》  
 kai n du dzinnu fi:ta  
 《彼にぞ 金を 呉れた》

### 7-3. 動作の存在する場所や時を示す場合は「n」で表す

vva: ndza n ga nivju:taiba  
 《君は どこにぞ 寝ていたか》

karja: nidzi n du kīndu kīsī  
 《彼は 2時にぞ 来る》  
 kama n bigu:so: to: jaba  
 《向こうに 座っているのは 誰か》  
 gakkō: n du pu:ro: a:  
 《学校に プールはある。》

### 7-4. 動作作用の到着するところのものを示す場合は「nkai」で表す

juku:jataibadu ja: nkai ikju:ta:  
 《休みだったので 家に行っていた》  
 kaiga ga kju: kifiba funi nkai nu:ī  
 ga ikī gamata:  
 《彼が 今日きたので 船に乗りに行くよ。》  
 kama nkai tivvi  
 《向こうに 投げなさい》  
 baja: atsadu mja:ku nkai ikī gamata  
 《私は明日 宮古島に行く》  
 kamanu sīma nkai bataradi  
 《向こうの 島に 渡ろう》

## 8. 係助詞「ga」について

国語の疑問文で疑問詞を用いたときの疑問文に出る終助詞「か」は、野原方言においては、文中の格助詞の後ろに「ga」で現れる。野原方言における疑問視は、to: 《だれ》、no: 《なに》、ndza 《どこ》、ndgi 《どれ》、itsī 《いつ》、no:finu 《どんな》、isika 《いくら》、no:fi: 《どう》、no:ti 《なぜ》、ifutsī 《いくつ》、no:ti: 《どうして》などである。

### 8-1. 格助詞に係助詞「ga」のつく文例

to: ga ga ffo: nasitaiba  
 《だれが 子供を泣かしたか》  
 vva: no:ju ga kakī taiba  
 《君は 何を 書いたか》

ndzĩnu ga vva ga kī'njaba  
 《どれが 君の 着物か》  
 uja: ndza'ŋkai ga piītaiba  
 《お父さんは だごに 行ったか》  
 puduikka: no:'ŋ ga naīgamatajaba  
 《大きくなったら なんになるつもりか》  
 ndzagami ga ikī gamata jaiba  
 《どこまで 行くつもりなのか》  
 parisīgutu:ba: itsīkara ga padzīmi  
 gamata jaiba  
 《畑仕事は いつから 始めるつもり  
 か》  
 no:finu pītunu ga ta tŋu:tarja:  
 《どんな人が 立っていたか》  
 ndzakara ga kīsītarja:  
 《どこから 来たのか》

#### 8-2. 接続助詞に直接係助詞「ga」のつく例

isiki kaiba ga tarjo:rja:  
 《いくら 買ったなら 足りるか》  
 ifutsī tukikiŋiba ga dzo:karja:  
 《いくつ 取ってきたら いいか》  
 no: ŋi: ŋŋiba ga dzo:tu'ŋ ŋirairja:  
 《どのようにすれば 上手く できるか》

#### 8-3. 疑問詞に直接係助詞「ga」のつく例

kunudzī:jaba: no: ti ga jamja:  
 《この字は 何と 読むか》  
 kurju:ba: no: ŋi ga ŋŋa:  
 《これをば どのように やるか》  
 imnu middza no:ti ga sukarakarja:  
 《海の水は なぜ 塩辛いか》  
 kurja: isika ga sīsītarja:  
 《これは いくら したか》

#### 8-4. 疑問詞に数助詞が接続してそれに直接係助詞「ga」がつく例

innu pagīza namboŋ ga arja:  
 《犬の脚は 何本あるか》  
 vva: kato:ba: ifukara ga tuītarja:  
 《君は バッタをば 何匹 捕ったか》  
 vva: nu:mo:ba: ifukara ga tsikai  
 urja:  
 《君は 馬をば 何頭 飼って  
 いるか》  
 kaitaga ja:dja: ifta: i ga  
 《彼らの 家族は 何人か》  
 adza: tamuru:ba: ifumarukī ga  
 muŋikiŋa:  
 《兄さんは 薪は 何束  
 持ってきたか》  
 agga: mbatu:ba: ifuka ga mi:tarja:  
 《姉さんは 鳩は 何羽 見たか》

#### 9. 係助詞「nu」について

野原方言において疑問詞を用いた用法の中では係助詞 du が現れるが、疑問詞を用いない場合は本来係助詞 du に代わって nu がもちいられる。nu が用いられる要素としては、話し手が「自分が思っていることを、軽く他の人に確認する」ような尋ね文に用いられる。ちなみに、話し手が全く知らないことを他人に確認する場合は nu ではなく du が用いられる。係助詞 du は、いろいろな文に自由に現れるが、疑問詞を用いた場合や命令の場合は現れない。

① vva ga nu kurju:ba: kakīta:na (知っていて確認する場合)

② vva ga du kurju:ba: kakīta:na (知らないで確認する場合)

《君が これをば 書いたか》

① in nu nu nakju:na (知っていて確認する場合)

② in nu du nakju:na (知らないで確認する場合)

《犬が 鳴いているのか》

①mja:ku kara nu kīsīta:na: (知っていて確認する場合)

②mja:ku kara du kīsīta:na: (知らないで確認する場合)

《宮古島 から 来たか》

①vva: sadari kara nu umaŋ u:na: (知っていて確認する場合)

②vva: sadari kara du umaŋ u:na: (知らないで確認する場合)

《君は 先から そこに 居るのか》

①karja: ukīna: ŋkai nu ikju:ta:na: (知っていて確認する場合)

②karja: ukīna: ŋkai du ikju:ta:na: (知らないで確認する場合)

《彼は 沖縄本島に 行っていたのか》

①so:ju nu tuī kīsīta:na: (知っていて確認する場合)

②so:ju du tuī kīsīta:na: (知らないで確認する場合)

《竿を 取って きたのか》

①baja: vva tu nu ma:tsīki ikī gamatana: (知っていて確認する場合)

②baja: vva tu du ma:tsīki ikī gamatana: (知らないで確認する場合)

《私は 君と 一緒に 行く事になるのか》

①ja:ma ŋkai ja funi fi nu ikīgamatana: (知っていて確認する場合)

②ja:ma ŋkai ja funi fi du ikīgamatana: (知らないで確認する場合)

《八重山へは 船で 行くのか》

①ja:ja gakko: juīza nu aga:tana: (知っていて確認する場合)

②ja:ja gakko: juīza du aga:tana: (知らないで確認する場合)

《家は 学校より 遠いか》

格助詞 ga 《が》、nu 《が》、kara 《から》、n 《に》 ŋkai 《へ》、ju 《を》、fi 《で》、tu 《と》、juīza 《よりは》のあとに用法によって nu と du が用いられる。

## 10. 沖縄各地域の方言辞典に見る助詞「nu」と「ga」について

「琉球方言の意味論・2000年」において名嘉真氏は、氏の出身地である宮古島市西原方言の助詞「が」と「の」について、主格のガと連体格のガが接続する語彙「人称代名詞、人名(同等または目下)、指示代名詞(人、物)、親族名称(目上)、数詞(人)、役職名」と主格のヌと連体格のヌが接続する語彙「普通名詞、指示代名詞(場所)、親族名称(主に目下)、数詞(生物、物)、役職」を品詞ごとに整理して示して、それぞれに文例を示しながら、主格と連体格のヌが接続しない人称代名詞と人名を明確にしている。そのうえでガとヌの用法と意味について「ガは、親愛、親近感を主観的に表す体言につき主格や連体格を示す。ヌは疎遠で客観性を表す体言に付き、主格や連体格を示す」と述べている。古代国語の助詞「の」と「が」の用法が残っていることを示唆している。

「宮古伊良部方言辞典」(2013年)のなかで富浜氏は宮古島市伊良部方言の格助詞「ガ」について「人称代名詞、人名には全てに用い、指示代名詞で人や物を表す語彙に用いること。親族語彙は目上の人にたいして用い、数詞で人を表す場合、役職名では、普通に用いて、活用語の連体形に用いる。」と述べ、多くの文例を提示している。また、日本語の連体格「の」が伊良部方言で「ガ」で表される用法については「人称代名詞、人名、指示代名詞、親族名詞の目下の親族、人を表す語につながる数詞、限定された役職名、活用語の連体形」につくことを例を示しながら述べている。また、格助詞「が」が

伊良部方言で「ヌ」で現れることについて「普通名詞、物、動植物、地名、人体の一部、神、太陽、月など人以外のものは『ぬ』を用いる。従って使用頻度は『が』より『ぬ』の方がずっと高い。人には『が』を用いる。そして、指示代名詞、親族名詞は目下には『ぬ』、目上には『が』を用いる。職業名。人以外に続く数詞、助詞『から』『だけ』『ばかり』に付く」と述べている。この伊良部方言の用法と機能はほとんど野原方言と共通する。

大蔵省印刷局・昭和50年「沖縄語辞典」国立国語研究所編においては、助詞「が」は、「人名、人代名詞などについて主格を示す。ただし、人を表す場合、その他の場合にも ga のつく例がある。」また、助詞「の」については属格を示すが、ただし、人名や一部の人代名詞などのふつう-nu を用いず-ga によって示す」と述べている。

「沖縄今帰仁方言辞典」(昭和58年)において、仲宗根氏は助詞「が」の格助詞については、代名詞、童名、人名、親族呼称、数詞、活用語の準体形、人称代名詞、指示代名詞につくことを示しながら、それぞれに詳しく文例を示している。助詞「の」については、「『が』のつく代名詞、・人名・親族呼称を除く他の体言につく。『が』のつく代名詞・人名・親族呼称以外の体言について主格を表す」と述べている。

那覇方言を中心にした「沖縄語辞典」(2006年)の中で野原氏・内間氏は、ga について「①が。主格を表す。人名、人称代名詞など身近にとらえている人間関係を表す語につく。主格は他にヌでも表される。②の。連体修飾語の働きをする。③動詞の連用形について『・・・しに』『・・・するために』の意を表す」とのべている。また、nu については、「①の。連体修飾語の働きをする。共通語では代名詞にも「の」をつけて所有を表すが那覇方言ではこの場合ヌは用

いない。ワームン〈私の者〉、ツアグサン〈君の杖〉ターチンガ〈誰の着物か〉たた、アリ〈彼〉、ウンジュ〈あなた〉には、ガを用いる。アリガムン〈彼の物〉、ウンジュガモン〈あなたのもの〉②が。の。㊦主格(主に人以外)や対象を示す。\*人、人称代名詞の主格にはふつうガを用いる。」とのべている。

「伊是名方言辞典」(平成16年)では、助詞ガ [ga] について次のように述べられている。

「(1)体言及び体言に準ずる形について、次の体言を修飾する。国語の連体助詞「の」に対応する。(イ)代名詞につく。(ロ)童名、人名につく。(ハ)親族呼称につく。(ニ)数詞につく。(ホ)接尾語につく。

(2)体言及び体言に準ずる形について、主格を表す。国語の主格助詞『が』に対応する。

(イ)人称代名詞、指示代名詞につく。(ロ)童名、人名につく。(ハ)親族呼称につく。(ニ)接尾語につく。」

「石垣方言辞典」(2003年)宮城氏は、辞典の中に別冊で文法・索引編を発刊し、助詞についても詳しく述べている。その中で助詞「の」と「が」について文例を示しながら詳細に述べている。

(1)ヌ [nu] (中)「が」又は「の」の意味を表す。

①主格を表す。②所有格を表す。③所属を表す。④所在を表す。⑤一・方向を表す。⑥行為・状態などの場所・時刻などを表す。⑦同格を意味する。⑧材料を表す。⑨属性を表す。⑩関係を表す。⑪いろいろな格助詞につく。

\*主格を表すときのヌ [nu] と前の⑤との接続の仕方

(a) 人称代名詞の一人称二人称の場合。

バーヌ アクン [ba: nu ?apkuŋ] (僕が言う)。ワーヌ ハルッカー [wa: nu harukka:] (君が行くなら)。

普通、一人称、二人称の単数・複数主格の

助詞ヌ [nu] を伴わず主格を表す場合が多い、ヌ [nu] を用いる場合は、主格にかなり強い意味を伴う。バー アンクッカー [ba: ? aŋkukka:] (僕が言うなら)が普通で、バー ヌ アンクッカー [ba: nu ? aŋkukka:] (他の人でなく僕が言ったら)のイになる。

(b) 三人称の単数・複数は、ヌ [nu] を省略することはできず、必ずヌ [nu] をつける。

(c) 人称代名詞の不定称の場合はヌ [nu] は、つなくてもつけてもよい。

(d) 親族名詞の故障の場合は、ヌ [nu] をつけるのが普通であるが、接続する語彙の語尾が母音ア [a] の場合はヌ [nu] を使用しないで語尾の母音がア [a] を長音にして言うことができる。

(e) 親族名称には必ずヌ [nu] がつくものがある。

兄弟、姉妹、父親、母親、伯叔父、伯叔母、祖父母、などである。

(f) 人名、人名のように用いられる普通名詞にはそのままの形にヌ [nu] がつくが、又、形が変わってつかない場合がある。

**\*所有格を表すヌ [nu] と前の語との接続の仕方**

(a) 人称代名詞の一人称、二人称、不定称の場合はすべてヌ [nu] はつかないで、前述の主格を表すヌ [nu] を省略した形とまったく同様である。

(b) 三人称の単数は、ヌ [nu] を省略することはできず、必ずヌ [nu] をつける。複数は、ヌ [nu] を付けない言い方もある。

(d) 親族名詞の呼称の場合は、ヌ [nu] をつける形はない。主格の、ヌ [nu] はつかない場合と全く同じである。

(e) 人名、人名のように用いられる普通名詞にはそのままの形にヌ [nu] がつくが、又、形が変わってつかない場合がある。原則的には、主格のヌ [nu] のつかない形である。

**(2) ガ [ga] (格助詞)**

石垣方言辞典の文法編において助詞 [ga] について全く触れられていない。助詞ガ [ga] について本篇の中に簡単に記されている項目だけを提示する。

「が」と同じく、下の体言にかかる。助詞「の」に当たる。バーガー シウマ [ba ga: si:ma] (我が島。われらの村)、バガダー [ba ga: da:] (我ら)

**11. まとめ**

**11-1. 野原方言における助詞「ga」と「nu」の用法と機能について**

**11-1-1. 主格にも連体格にも全て助詞「ga」がつく**

野原方言においては、人称代名詞と人名及び指示代名詞、童名・神名は主格と連体格の両方には助詞 ga がつく。指示代名詞でも人を表す場合は両方に助詞 ga がつく。人以外を表す普通名詞にもつく。連体格に ga のつく例

[事物を示す場合]

kui ga naizuba: vva ga fai  
《この実は 君が 食べなさい》

ndzi nu funuĩ nu ga mmakaiba  
《どの ミカンが おいしいか》

ui ga tanju:du ibita:  
《その 種を 植えた》

[人を示す場合]

kui ga ti:ju tsu:ku ntʃamiru  
《この手を 強く 掴まえろ》

ui ga ujanudu kamaŋ tatʃu:ta:  
《その親が 向こうに 立っていた》

kai ga buto: pariŋkaidu piita:  
《あれの夫は 畑に 行った》

この傾向は宮古島方言全体に見られる傾向である。岩波古語辞典においては、古典語の「が」



と「の」の用法について「『が』が人称代名詞または人をさす名詞を承ける場合は、自己の身内とする者に対する卑下・親愛・無遠慮などの意味を併せて示したとあるが、尊敬や敬愛などは人に関する場合に起こる感情であり、そのために人に強く関係する語彙には助詞 ga が接続すると思われ、野原方言においても同様な用法、機能が表れる。

ba ga mi:ku:ttfa: matfu:i  
 《わたしが 見てくるから 待っておれ》  
 vva ga fa:daka: ba ga fa:di  
 《君が 食べなければ 私が 食べる》  
 kai ga nakju:ibadu fuwa:fi:u:ta:  
 《かれが 泣いていたので 心配していた》  
 to: ga ga umanu izaro: mutfi piitaiba  
 《誰が その 鎌を 持って行ったか》  
 kunukina ba ga munu  
 《この着物は 私のものだ》  
 vva ga dusi nudu kamakara kisi  
 《君の友達が 向こうから くる》  
 kai ga anna: ukinaikaidu piita:na  
 《彼の母親は 沖縄に 行ったか》  
 Vva: to: ga ffajaba  
 《君は 誰の子どもか》

一方「石垣方言辞典」によると石垣においては宮古方言とは逆に人称代名詞、人名には助詞 nu が接続すると述べられている。

現代的な役職にある者については助詞「ga」が用いられる。

kutfo: ga du dzig tuī ga mmjaiju:ta:  
 《区長がぞ お金を 取りにいらっしやっていた》

職業に連体助詞「ga」がつくのは「先生」の一例である。

finfi: ga panasiza itsimai  
 umuffiduuramai

《先生の話は いつも  
 面白くいらっしやる》

班のまとめ役である班長は地域では頼りになる信頼され、尊敬される人物である。表現としても mmjaiju:ta 《いらっしやっていた》と尊敬語である。先生も職業として地域の人たちに親しまれ、最も尊敬される存在である。表現としても uramai 《あられる》という尊敬語に使うことが普通である。

### 11-1-2. 同属語彙において語彙の性質によって接続する助詞が「ga」か「nu」になる

主格を表す親族名称は ga と nu の2つの主格助詞が接続する。ga が接続するのは、fu: [祖父]・mma [祖母]・iza [父]・anna [母]・adza [兄]・angga [姉] bubama [叔母] budzasa [叔父] この語からもわかるように文例を見ても一般的に目上又は尊敬、親愛する人について ga が接続している。《来る》という意味では mmjai 《いらっしやる》《食べなさい》は 'ŋkigisamatfi という尊敬の表現になる。基本的には話し手にとって家族であり、身近な存在である場合が普通である。話し手とはウチの関係になる。

adza ga du fusakai ga piita:  
 《兄がぞ 草刈りに 行った》  
 budza ga du ja:ju fukju:  
 《伯父がぞ 家を 造っている》  
 fu: ga du tabaku: fukju:  
 《おじさんがぞ たばこを 吸っている》  
 mma ga du atukara kisi  
 《おばあさんがぞ 後から きた》  
 bubama ga du sadari iki gamata  
 《叔母さんがぞ 先に行くんだよ》

親族語彙については目下になる者や親しい親族 ututu 《弟》、mju:i 《姪》、itsifu 《従妹》、muku 《婿》、jumi 《嫁》 mmaga 《孫》 nasiki:fa 《末

っ子》などは助詞 nu が接続する。基本的には家族というよりも分家や親せきに当たる存在であることが多い。ウチ・ソトの関係でいえばソトの関係になる。助詞 nu がつく例は次のとおりである。

ututu nu du nakjuiba sa:ri:ku:  
《弟がぞ 泣いているので 連れてこい》

tfo:nan nu du fuso:karju:  
《長男がぞ 草を刈っている》

nasiki:fa nu du parju: kazu:  
《末っ子がぞ 畑を 耕している。》

mju:i nu du baru: abirju:  
《姪がぞ 私を呼んでいる。》

mmaga nu du asipi ga kisita:  
《孫がぞ 遊びに 来た》

私にとって bunarja、bunaï [姉妹]・bikirja、bikiï [兄弟] については、目上、目下の区別があいまいのため ga がついても nu がついてもあまり違和感がない。

①bikirja nu du surui: sakju: numju:

②bikirja ga du surui: sakju: numju:  
《男兄弟がぞ 揃って 酒を 飲んでいる。》

①bunarja nu du juigu ni:ju:

②bunarja ga du juigu ni:ju:  
《姉妹がぞ 夕餉の 支度をしている。》

これまでの例を見て野原方言の親族名称においては助詞 ga がつくのは一般的に目上を表す語彙であり、尊敬や敬愛を示す親族に助詞 ga が接続しているがわかる。その意味では古代日本語の助詞がの用法が野原方言に残っていると考えられる。

人数を表す数詞に ga のつく例は極めて少ない。tavkja:《ひとり》、futa:i《ふたり》mitsa:i《三人》、juta:i《四人》の4つだけに助詞 ga がつく。つく例は次の通りである。

tavkja: ga sadari piribadu m:na piita:  
《ひとりが 先に行ったので 皆行った。》

五人以上表す語彙は《数+nu+pitu》と複合語で表され、「何人+助詞の」がつく形になるのでそれに接続する助詞は nu になる。

itsinupitu nu du asipi:ga kifu:  
《五人が 遊びに 来ている》

人数を表す語に連体助詞「ga」のつく例はこの四例だけである。

役職の場合「ga」がついても「nu」がついてもあまり違和感がない。

①kutfo: ga panasiza atidu na gaka:

②kutfo: nu panasiza atidu na gaka:

《区長の話は あまりにも長い》

指示代名詞の疑問称には ndzi《どれ、どちら》には、助詞 ga と助詞 nu のどちらもつく

①ndzi ga ga vvaga nu:majaba

②ndzi nu ga vvaga nu:majaba

《どれが 君の 馬か》

①ndzi ga ga vvaga ffajaba

②ndzi nu ga vvaga ffajaba

《どちらが 君の 子どもか》

### 11-1-3. 連体格助詞「nu」がつく例

野原方言における連体格助詞「nu」は国語の連体格助詞「の」に対応する。ただし、前述した連体格助詞「ga」が接続する語、人名、人称代名詞、数詞、指示代名詞以外の語には連体格助詞「nu」がつく。連体格助詞「nu」は「ga」より多くの語に自由につく。

普通名詞に連体格助詞「nu」のつく

ki: nu judo: buina

《木の 枝を 折るな》

nu:ma nu mi:ja kagimunu

《馬の 目は きれいだ》

代名詞に連体格助詞「nu」のつく例

kuma nu ja:nna to:mai ura'ŋ

《この 家には 誰も いない》

uma nu pano: kazaribadu dzo:fu naï

《そこの 花を 飾った方が 良くなる》  
 ikitsika: kama nu ja:nu tsikafundu a:  
 《行ったら あそこの家の 近くにある》  
 ndza nu ja:nu ga vvata ga ja:jaba  
 《どこの 家が 君たちの家か》  
 kantfi nu pano:ba: mi:ta:kuto: nja:n  
 《こんな 花は 見たことがない》  
 antfi nu jugurikiŋnuba:mu tfi:iki  
 sitiru  
 《そんな汚れた着物は 持って行って  
 捨てる》  
 antfi: nu funju:ba: ndzanga tsufu:  
 《あんな 船は どこで作っているか》  
 no:fi: nu pudubaka:inu nu:manuga  
 dzokaba  
 《どんな 大ききぐらいの 馬がいいか》  
 ka:ddgatsika: ku nu pano:kai  
 《買うなら この花を買え》  
 u nu ffa: to:ga ffajaba  
 《その子どもは 誰の子どもか》  
 ka nu ki:nudu findaŋ gi:sai  
 《あの木が センダン木だよ》  
 ndgi nu funinga vva: nu:i gamata jaba  
 《どの 船にが 君は乗るつもりなのか》  
 数詞に連体格 nu のつく例  
 五人以上になると《数》+助詞 (nu) +《人》  
 「pitu」の形になり連体格助詞「ga」がつくこ  
 とはない。五人以上を表す数詞にはすべて連体  
 助詞「nu」がつく。  
 ugana:rju: kukunu pitu nu  
 dza:ju tsufi: sakju: numju:  
 《集まっている九人の人がぞ  
 座を作って 酒をの飲んでいる》  
 sugari:nu tunupitu nu bakamununu  
 aiki: kisī  
 《着飾った十人の 若者が  
 歩いて くる》

主格助詞の項で述べたように人間以外の動物  
 を数える国語の数詞《匹、頭、羽》は野原方言  
 においてはすべて「kara」で表現される。連体  
 助詞においてはすべてに連体格助詞「nu」が接  
 続し、後ろに係助詞 du〈ぞ〉が現れる

pitukara nu in nudu upuguijafi: buiju:  
 《一匹の 犬がぞ 大きな声で吠えてい  
 る》  
 piti:tsī nu funiizu du mutfi piita:  
 《ひとつの ミカンをぞ 持って 行った》  
 futa:tsī nu fukjagju: du fainja: ŋ  
 《ふたつの おはぎをぞ 食べてしまっ  
 た》

職業にはすべて助詞 nu がつく

imbo: nu amma izutuī nna dzo:to:saiga  
 《漁師の網は 漁を捕りには上等だよ》

野原方言の助詞 nu は古代国語の助詞「の」に  
 対応するが、古代国語においては助詞「の」が  
 「が」よりも尊敬、敬遠を含む傾向がみられる  
 と述べられているが野原方言でも、あまり、そ  
 の傾向はみられなかった。しかし、助詞「ga」  
 については、多くの特徴的な用法や機能が古代  
 国語の助詞「が」の特徴に類似することなどが  
 確認できた。この論文では、野原方言における  
 助詞「nu」と「ga」についての文例資料を多く  
 提示したので、これからの方言研究において、  
 沖縄方言全般をモーラした資料を集めて、これ  
 らを比較検討しながら、十分に検証を加え研究  
 を進めていく事が重要と考える。

#### 主要参考文献

島尻 澤一

1983「琉球宮古方言の助詞 ー野原方言の助詞  
 ga と nu を中心にー」琉大国語2集 琉球大  
 学国語学研究会

1984「琉球方言宮古野原方言の音韻の研究」琉  
 大国語3集 琉大国語学研究会

2021「宮古城辺方言の音韻の研究—旧城辺町史  
のための調査資料中心に—」宮古島市総合博  
物館紀要・第25号

2011「宮古島市西里方言の音韻」宮古の自然と  
文化・第3集・宮古の自然と文化を考える会  
富浜 定吉

2013「宮古伊良部方言辞典」沖縄タイムス社  
大蔵省印刷局

昭和50年「沖縄語辞典」国立国語研究所編  
仲宗根 政善

昭和58年「沖縄今帰仁方言辞典」角川書店  
宮城 信勇

2003「石垣方言辞典」沖縄タイムス社

平成16年「伊是名方言辞典」伊是名教育委員会  
新里 博

2003「上代倭語の化石:宮古方言の手引き・宮古  
方言諺音義」渋谷書言大学事務局

内間 直仁・野原 三義

2006「沖縄語辞典・那覇方言を中心に」株式会  
社・研究者

内間 直仁

1990「沖縄言語と共同体」社会評論社

中松 竹雄

1973「沖縄語の文法」沖縄言語文化研究所

橋本 進吉

昭和44年「助詞・助動詞の研究」岩波書店

西田 直敏

1977「助詞(1)岩波講座・日本語7 文法Ⅱ」岩  
波書店

安田 章

1977「助詞(2)岩波講座・日本語7 文法Ⅱ」岩  
波書店

名嘉真 三成

2000「琉球方言の意味論」株式会社ルック

山田 実

昭和56年「奄美・与論方言の体言の語法」第一  
書房

野原 三義

昭和61年「琉球方言助詞の研究」武蔵野書院

1998「新編・琉球方言助詞の研究」沖縄学研究  
所

本永 守靖

1994「琉球圏生活語の研究」春秋社

中松 竹雄

2006「沖縄県宮古のことば」沖縄言語文化研  
究所

大野 晋 他編

「岩波古語辞典」岩波書店